

角」に基づいて本書の全体像を簡単に紹介することとした。

下程勇吉編『日本の近代化と人間形成』

(法律文化社、昭和59年、332頁、2,500円)

1

本書は、京都大学名誉教授・下程勇吉博士編集によるもので、そのあとがきに述べられているように「今日日本国内というよりも、むしろ国際的に関心をもたれている学問的研究の1テーマとなっている日本の近代化について、とくにその人間形成との関係を取り上げ、指導者篇と分野篇に分けて考察する」(本書332頁、以下本書よりの引用は頁数のみを記す)との意図のもとに16人の研究者によって執筆されたものである。

本書の構成は、最初に編者下程氏の「日本の近代化と人間形成」と、久木幸男氏による「教育近代化と研究視角」と題された本書の全体を展望する2本の論稿と、先に触れた「指導者篇」と「分野篇」の3部からなっている。

「指導者篇」では、「福沢諭吉—日本の近代化への貢献」(栗田修)、「中村正直—人間性質の内的改造」(村田昇)、「森有礼—初代文相の経綸」(久木幸男)、「井上毅—近代立憲国家機構の制作者」(野口伐名)、「西村茂樹—文明開化と国民道徳」(沖田行司)、「伊沢修二—国土の造型」(上沼八郎)、「手島精—工業教育の父」(山崎高哉)、「新島襄—キリスト教主義教育者」(井上勝也)と8人の教育指導者を取り上げ、「分野篇」では、学校制度の枠内で「中等教育」(神辺靖光)、「高等教育」(寛田知義)、「女子教育」(岡本道雄)、「キリスト教教育」(森章博)、「産業教育」(竹内義彰)の各分野と、家制度、軍隊制度との関係で「家庭教育」(牧文彦)、「軍隊教育」(石井完一郎)について考察がなされている。ここでは、表題にもなっている下程氏の「日本の近代化と人間形成」と久木氏の「教育近代化の研究視

2

日本の近代化が、明治維新に始まることは、一応、我々の間で共通に理解されていることである。時期についての問題はないにしても、「日本の近代化」とは何を意味しているのかという概念そのものの問題となると、研究者によりそれぞれ解釈が異なっているのであるが、本書は、「一応共通の枠組または最大公約数的な境界」(2頁)を認めたくえて、「日本の近代化」という事実そのものについて教育の領域から見直そうとする一つの試みである。

下程氏は、先づ総括的に近代化の「第一必須前提条件」を「民族的国家的独立」(4頁)にあるとする。それは、「近代的な技術・軍備・政治・経済・教育の組織体制なしに、民族的国家的独立はあり得ぬとともに、一応前者によって近代化された民族・国家も実質的にその独立を奪われて属国化せられるとき、それは近代化せられた自由な民族・国家としての誇りと幸福を享受し得ぬことは、東欧諸国の現実が端的に物語る通り」(3～4頁)だからである。幕末から明治維新にかけては、1839年(天保10年)より42年に至る阿片戦争、1858年(安政5年)の印度の英国属領化、そしてつぎは日本の植民地化が予想されるような、まさに日本の民族的国家的独立が危機に瀕したときであった。徳川幕府230年の泰平を保った封建制度、同時に、それを滅ぼしたのも封建制度、といわれたように軍事的経済的そして思想的に権威、実力ともに喪失していた幕府は、「内外に前古末曾有の民族的国家的危機に直面」(6頁)していたのである。「封建幕府体制を一新し、日本の近代化を成就し、民族的国家的に独立することが」(7頁)、歴史的課題となった。「世界史的奇蹟」とまでいわれるような評価を得た「日本の近代化」という歴史的課題を解決した鍵は、どこに求められるのであろうか。

下程氏は、「世界史的奇蹟とまで称せられる日本の近代化もやはり日本の歴史的な地盤と背景と伝統の上に成就された」(7頁)ものであることを認

めている。即ち、手工業の発達、流通経済・陸海交通網の発達、同行・隣組・町人組合等の共同体の成立、一民族・一国家の社会構成、ことに藩学・私塾・寺子屋等の普及による庶民教育の普及、神・仏・儒三教による国民的精神的伝統の成立等が、近代化にたいする日本独自の基底をなしていたことは、歴史的事実である。しかしながら、日本の近代化の「決定的推進力」として下程氏が挙げるのは、読・書・算中心の庶民教育の普及を底辺として、そこに生まれた「日本民族の精神的伝統の統合的代表者として日本の近代化を推進し、日本の民族的国家的独立をその歴史的使命として自覚し、その生涯を其道のために捧げた」（8頁）卓越した近代化の指導者たちである。まさに彼等は、「日本民族の道徳的精神の代表者」として日本の民族的国家的独立の課題に取り組んだのであった。この点にこそ、歴史的民族的条件はことなるにしても近代化を押し進めていこうとする民族・国家にとって「自覚の主體的に努力すれば、よく学び取り実現し得るメリットである」（8頁）と下程氏は注目しているのである。「近代化の出発点としての前代の教育遺産および近代化推進要因としての教育という」（27頁）ことを指摘しているパッシンヤドーアの観点と、下程の道徳的精神の伝統に注目して近代化に貢献した指導者を取り上げようとする観点には共通のものがあるといえよう。こうして「実に日本の近代化の大動脈は、人間形成そのものにあったのである」（9頁）と規定される。日本の近代化に貢献した指導者たちはいかにして形成されたのであろうか。

3

ここで日本の近代化を促進した指導者の人間形成が問題となるが、これに関して、下程氏、久木氏は指導者に共通して見られる3つの特徴を挙げている。

下程氏は、先ず第一に、彼等のほとんどが下級武士の出身であり、そのきびしい生活の間に身心ともにきびしい試練を通じてよく人間と人生の真実を

躬行心得するところがあった人材であった、と指摘する。第2に、彼等は、自己発見・自己確立の時期になんらかの動機により「全人格的振蕩体験」に洗礼されている。それは、例えば「門閥制度は親の敵でござる」（40頁）といった福沢諭吉の激しい憤りであったり、「工業教育の父」といわれている手島精一がアメリカに着いて目にしたその物質文明の偉大な進歩に驚いた体験である（169頁）。第3に、彼等は何等かの意味で日本の精神的伝統を培った神・仏・儒の精髓を心の糧とも魂の支えともして、揺るぎない人格的アイデンティティを確立し、そこからよく西洋のテクノロジー・軍勢力・経済等の恐るべき威力をその全き重さにおいて受けとめ、それを自家薬籠中のものとする近代化の方向に果敢に邁進したのである。（9～10頁）

久木氏によると、第1に、明治維新当時、彼等はおおむね30歳代以下の年齢であったこと（西村のみは41歳）、第2に、維新前後の数が年間に英米に留学または渡航していること（留学しなかった井上・西村も洋学を学んでいる）、そして第3に、いずれも武士の出身で留学以前に儒学の基礎教養を身につけていたことである（31頁）、両氏の間には若干の違いはあるにしても、近代化に貢献した指導者の人間形成に関して、ほぼ共通している特徴を指摘している。

この日本の近代化の指導者を下程氏は、『幾たびか辛酸を経て、志はじめて堅し』と詠ずるとともに、よく『敬天愛人』の地平を開き、西洋に厚生救済施設あることに感激した西郷隆盛が『サムライ』であり、武士道的基督教の立場にたった内村鑑造・新渡戸稲造、さらに新島襄が『サムライ』であった」（10頁）という意味での「サムライ」というのである。またある講演のなかで、下程氏は、「どっしりと『肚』がすわる金剛心と、おおらかに『胸』を開く柔軟心とからなる人格構造が、日本近代化の先達の指導者の根本的特徴であります」と述べている。

本書は、日本の近代化を成就して民族的国家的に独立するといった歴史的課題に主体的に取り組んだが教育界の指導者として、福沢諭吉以下8人をとりあげ、彼等が教育の近代化過程にのこした足跡をその人間形成という点を

ふまえつつ追求したものである。

4

「封建体制下にあった日本が半世紀を出ずして近代的独立国家となったことは、世界史における『奇蹟』である」(3頁)と評価されているが、一方で「日本の近代化は、富国強兵主義さらには天皇制絶対主義という錦の御旗の下に、自由民権思想を蹂躪して、強行軍をつづけたのである。」(11頁)下程氏は、「日本の近代化という強行軍のために払われた草の根の人々の深刻な犠牲こそ、牢記されねばならぬ」(14頁)という。なぜならば日本の民族的国家的独立を獲ち得た近代化は、実は農民の汗ににじむ地租、草の根の人々の「血税」にささえられた富国強兵策の所産でもあったからである。そこに日本の近代化そのものの問題があったのであり、「建国以来最初の敗戦という前古未曾有の民族的国家的破局の試練」(15頁)、「昭和の悲劇」をむかえることになったのである。下程氏は講演のなかで「日本の精神的伝統というものは、あれだけの指導者を出し、日本国民全体の民族的なエネルギーを傾けて近代化をやり遂げましたけれども、しかし昭和の悲劇というものが起こってきたのは、草の根の問題が十分に解けていなかったからであります」とのべている。明治以来の日本の近代化の功罪・光と影はここにおいて明らかとなる。

「日本の近代化と人間形成」の論稿の最後では、「戦後外から与えられた民主主義乃至基本的人権なるものは、自ら苦しみ戦いといった重みがないままに、それを行使し主張する現実的格率は、我欲性である」、「すなわちゴネドク主義の民主主義であり、我欲中心の基本的人権である」、そしてさらに「維新前後に日本の近代化にすべてを捧げた先覚者のような『サムライ』の代わりに、あくどい『利権屋』のみが基本的人権中心の新憲法下に時めくところに、現在の太平洋王国日本の蔵する最大の危機があるのではないか」(16頁)と現代社会の問題性が指摘される。そしてゴネドク主義にはしり、眼中天下国

家ないままにつばしるならば、「内に、教育・倫理のはてしなき荒蕪を招いて国家の屋台骨を腐蝕しつつし、外は、万国共存共栄の原則を忘れ、一時的利害に眼が眩み、第二次大戦の轍を踏まぬともかぎらぬ」と下程氏は警告する。そうならぬために「われわれは、一時的利害にとらわれるゴネドクの視野を断乎一擲し、ルソーのいわゆる『一般意志』に還り、東西・彼此の対立をこえる全人類の普遍的地平において民族的国家的独立の存在理由をみいださなければならないのである」(17頁)として、「天・仏・神の道としての普遍的超越的地平の精神的伝統を再確認し、そこに帰らなければならない」のであり、「ここに、現代の日本が直面する世界史的局面における高次の近代化の課題がある」(17～8頁)と訴えている。

臨教審がスタートして盛んに教育改革論議が行なわれているのであるが、機構改革のみに止どまっていたのでは徹底しない教育改革をくりかえすだけである。下程氏は、「日本近代化の一大動脈が人間形成の道そのものであったことは、明白に結論せられる」としたうえで、「教育は、政治家などが安易に考えるがごとく、機構改革で簡単に、成果をあげられるものではなく、何よりも人間そのものの問題である。教育は、人間が人間を人間にまで陶冶する人間の営みであるからである。人なくして、教育はなく、教育なくして、日本の近代化はあり得なかったのである」(19頁)と結んでいる。本書は、今日、我々が現代の日本を考え、教育を考えるとときに多くの反省材料・課題、そして示唆をあたえてくれるものである。(奥村寛)